

第11回 校長会議あいさつ

R.7.1.22 稲垣

先週までのきりりとした冬日から、今週は小春日和となっています。昨年末、学校では、インフルエンザによる学級閉鎖が頻発しましたが、今のところは落ち着いています。しかし、社会全体では「警戒」をはるかに上回る状況にあり、学校には基本的な予防対策を徹底するように指導していきたいと思います。

本日は、二点についてお話しします。

コロナ禍からの脱却が進みつつあります。一般社会では、元に戻らないこともあるようですが、学校教育については、教育活動の価値を再確認しながら、戻すべきものは回復させなくてはなりません。また、働き方改革においても、残業時間の縮減を目的化してしまい、業務の効率化だけを最優先してしまう勘違いを感じることもあります。今日まで60年にわたって、三河の教師が連綿と積み上げてきた教育の成果を、3年間ばかりのコロナ禍で失うわけにはいきません。一例を挙げるなら、ひとり調べ(個別最適な学び)～かかわり合い(協働的な学び)という指導プロセスは、三河の教育文化の中に息づいてきたものです。また、総合的な学習は言うまでもなく、昨今の文科省の志向する授業改善は、大方、三河の教育が先行実践してきたものと言えると思います。そういう気概を持って取り組んでいきたいものです。そのためには、教育活動の中心である授業を改善し続ける営みが不可欠です。各学校の現職教育をはじめ市教研活動を充実するとともに、教育委員会の学校訪問等においても授業改善について再確認していきたいと思います。

二点目は、学校の情報発信についてです。以前、ある調査の中で、学校との関係が希薄な人ほど、学校に対する評価が低いということが判明したと話しました。昨年5月に出された一般社団法人教育調査研究所の報告においても、「日本の教育はOECD各国の中でもトップクラスの成績である。」としつつも、「マスコミ等では、マイナス面が多く取り上げられ、学校についての正しい情報が多くの人々に正しく伝わりにくい状況がある。」と述べられています。また、有識者の見解としても、国土舘大学こどもスポーツ教育学科の喜名朝博教授は「学校の負のイメージは、マスコミ報道等の外から見たもので作られている。様々な報道がなされる度に、社会はどの学校も同様だと一般化してしまう。」と述べています。実際、いじめの認知件数だけが独り歩きし、全ての学級で深刻ないじめが起きているような誤解や、「スクールカースト」のような誇張した流行語さえ耳にします。この忌まわしい風潮に対抗するため、これからの学校は、明るい話題を積極的に発信する必要があります。本市の学校においても、地方紙をはじめ、さまざまなメディアを通して、児童生徒の輝く姿を地域に発信していますが、今後もさらに地域社会の理解を促し、信頼感が高まるように努めていきたいと思っています。